

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 111 回 飯島流「小泉ミーハー論」～今回は選挙に行こう！

もうじき、突然の衆議院の総選挙、「何でこうなっちゃった！」とは、周知の如くである。相変わらず「デバ亀」報道に終始するマスコミには、閉口しっぱなしだが、でも、全国的にこれほど「政治」や「選挙」で盛り上がることは、今まであまりなかったことであり、基本的には、「大変いいこと」と感じている。

コラム第 111 回は飯島流「小泉ミーハー論」である。

今回の選挙大フィーバー、その最大の功労者は、「小泉純一郎」以外ない、と言い切っている小生である。好きだ、嫌いでは色々あっていい。でも明らかに、今まで我国にはいないタイプの政治家であり、延々と続いた既成事実を「ぶち壊す」には、ベストキャストिंगである。「彼なら...」というほのかな期待を持ちたくなるキャラクターであること、間違いない。もし「小泉純一郎」でなかったら...と考えると、納得できるかもしれない。

他人はともかく、自分の主張を聞かせて欲しい、自分の考えはなく、人の欠点をつくのが「野党」と自覚している国会議員、もう、国民は飽き飽きしていること、知るべきである。彼らにも与党と同じ税金が使われていると思うと、それこそ「財政改革」、税金の無駄遣いである。悪口ではなく、政策をチェックするのは、大量な税金を使う国会議員でなくともいいかもしれない。何時までも国民を「ごまかし」続けてはいけない。「小泉純一郎」は基本的に、他人の悪口はあまり言わないタイプの政治家である。

いい、悪いは別、選挙の結果で示せばいい。とにかく「小泉純一郎」は自分の「意思」「主張」をはっきり述べる。訳が分からん「政治家用語」を使わずに、我々庶民と同じ「口語体」で話す。代議士を「偉い人」にしてしまったのは、有権者である。そして、確かに偉そうな代議士が沢山いる。それに比べ小泉さんは、日本の最高権力者であるにもかかわらず、大衆的に見える。結果、大変分かりやすい。親しみやすいと「誤解」(?)されるかもしれない。これも小泉流「変人」戦略、見事なものである。

今回の選挙で、仮に、小泉流が過半数を制すれば、本当に自民党は変わる。ということはつまり、日本の政治のシステムが変質することになるだろう。これをもって「改革」というか否かは、諸説マチマチ。でも、時代の流れは、何時までもここに、停滞することはないはず。それも実は選挙、有権者、国民の意思であること自覚せねばならない。

小生、小泉首相にお会いしたこともなく、実態はほとんど知る由もない。そのような意味では全く「ミーハー」の域を超えていない。正直なところ、人間的、感情的には好きなタイプではない。しかし、時代の要請を受けている人かもしれないこと、特に「改革」という、反対の大波を乗り越えるには、この人は「大切な人」と思っている。自社の僅かな「改革」すら手こずっている自分にとって、「羨望の眼」に見えてしまうのが、反省である。